

# 薬史レター

(薬史学会通信改題)

日本薬史学会

J S H P



第43号

2006年8月

〒113-0032 東京都文京区弥生 2-4-16 (財)学会誌刊行センター内日本薬史学会事務局  
TEL (03)3817-5821 FAX (03)3817-5830 URL <http://yakushi.umin.jp/>

日本薬史学会 2006(平成 18)年会・見学会へのご参加をお待ちしています。

年 会 長 名城大学(薬)名誉教授 奥田 潤  
事務局長 名城大学薬学部助教授 飯田 耕太郎

2006年会は平成18年11月11日(土)に学会(名城大学薬学部)、12日(日)に内藤記念くすり博物館への見学会の2日間のスケジュールで行われます。

11月11日の学会の一般演題は、江戸時代の唐薬、洋薬について2題、明治時代からの薬学および薬学教育に関するもの5題、ドラッグストアの歴史に関するもの1題、韓国の医薬史博物館に関するもの1題、イングランド、フランスの薬学の歴史に関するもの3題の12題です。

本年より薬学教育6年制がスタートし、薬学生が実習に行く病院薬剤部の歴史に本年会として光をあてようと考え、シンポジウム「日本の病院薬剤部・薬剤師の歴史」を企画しました。内容は労災・日赤・名大の各病院薬剤部の歴史に関するもの3題、多くの国立病院は、終戦前は陸軍病院であったものが多く、明治以来の陸軍薬剤官の歴史が1題、臨床薬剤師の教育を始めた名城大学薬学部専攻科教育の歴史が1題、最後に50周年を迎えられた日本病院薬剤師会の歴史について、同会顧問加野弘道先生の御発表があります。

最後は徳川美術館副館長、山本泰一氏による「徳川家康所持の香・薬を中心にして」という題で特別講演をお願いしてあります。

その後、薬学部内食堂で懇談会を行います。

翌12日は、名古屋の近郊、内藤記念くすり博物館(岐阜県各務原市)において、同博物館の見学会を行います。

今年は、館長の篠田愛信氏(副年会長)のご配慮で、大同薬室文庫の蔵書、資料が野尻佳代子、伊藤恭子両学芸員によって説明されます。

同館で昼食時、薬膳弁当をとり、下山順一郎先生の胸像、犬山城を見学後、解散する予定です。

会員の皆様には、幅広い薬史学の知識を得るために是非、年会・見学会に参加されるようご案内致します。

## 日本薬史学会 2006(平成 18)年会・見学会参加要領

年 会：日 時：平成18年11月11日(土)

会 場：名城大学薬学部 〒468-8503 名古屋市天白区八事山150  
名城大学八事校舎：地下鉄八事駅6番出口東へ徒歩5分

主 催：日本薬史学会

共 催：名城大学薬学部・エーザイ(株)内藤記念くすり博物館

年 会 長：奥田 潤(名城大学薬学部)

年会テーマ：“未来へつながる薬史学”

特 別 講 演：山本泰一先生(徳川美術館副館長) 演題：徳川家康所持の香・薬を中心にして

研 究 発 表：口頭発表(1演題18分：発表・質疑応答2分を含む。時間厳守)

年会参加費：2,000円(当日2,500円、学生：無料)

懇 親 会：11月11日(土)年会終了後。会費：4,000円(当日：5,000円、学生：1,000円)  
会場：名城大学薬学部内(学内レストラン・四季)

見学会：11月12日(日)内藤記念くすり博物館(エーザイ川島工園)及び犬山城と下山順一郎博士胸像を訪ねる薬史学ツアーを計画しています。

参加ご希望の方は年会参加申込と一緒に年会事務局にお申し込み下さい。

JR尾張一宮駅正面東口(集合8:45)ーバスー9:30内藤記念くすり博物館見学(午前)

12:00昼食・薬膳弁当(1,600円)ー13:00内藤記念くすり博物館出発

14:00下山順一郎博士胸像・犬山城ー16:30名鉄犬山遊園駅ー17:00 JR名古屋駅解散  
尾張一宮駅まで、及び犬山遊園駅からの電車賃、薬膳弁当は各自でお支払下さい。

### 「大同薬室文庫」および付属資料(中野康章旧蔵)

内藤記念くすり博物館 篠田 愛信

大同薬室文庫は、漢方医・中野康章(1874～1947)が明治末から大正・昭和初期のころに収集したものである。康章は秋田県出身で代々神職の家に生まれた。幕末から明治にかけて活躍した漢方医の大家・浅田宗伯に学び、宗伯の養子嗣・浅田恭悦と漢方医学の研鑽を積んだ。大阪・福島村社中之天神社社掌に従事しながら、多くの患者の診療を行った。気さくな人柄で人望も厚く、医院の看板を掲げていないにもかかわらず、診察を訪れる人が後をたたなかつたといわれる。康章は神職や医業のかたわら、収集した資料や書籍は、薬学関係だけでなく多岐の分野にわたっている。江戸時代の短冊・軸物が多いことと歌人などは自筆本が多い。書画・地図・絵図・絵画・絵巻物・和歌や俳諧の短冊など13,800点あまりの資料である。自ら絵画を学び、国学者に教えを受けた。趣味多彩で多方面に造詣が深かつた事がうかがわれる。蔵の状態もさることながら幸い戦災にもあわなかつたので散逸することなく、痛みも少なくきわめてよい状態で保存されてきた。

日本薬史学会 2006(平成 18)年会 発表プログラム

- 8:50 開会 挨拶 年会長 奥田 潤
- 一般講演発表(12名)
- 9:00 1. 宝暦五、六年における輸入唐薬の流通—長崎から大坂、さらに江戸へ— 羽生 和子
- 9:20 2. 向井元升と西洋医薬品について ミヒエル・ヴォルフガング
- 9:40 3. 丹波敬三と衛生・裁判化学 ○末廣 雅也, 川瀬 清
- 10:00 4. 東京薬学新誌に関する考察(Ⅱ) 吉沢 逸雄  
—薬学雑誌ほか明治初頭の資料から窺われる当時の薬学の状況—
- 10:20 5. 星一の受領したドイツからの褒賞の品々 三澤 美和
- 10:40~11:00 休憩
- 11:00 6. 戦後日本の薬学運動史(2) 川瀬 清
- 11:20 7. 日本薬剤師会が薬学教育改革に果たした役割と限界 山川 浩司
- 11:40 8. 日本のドラッグストアの歴史に関する一考案 ○佐藤 知樹, 串田 一樹
- 12:00 9. 韓国のくすり博物館、医史学博物館の紹介 石田 純郎
- 12:20~13:10 昼食・休憩
- 13:10 10. Hans Sloaneと17・18世紀イングランドのアポセカリ 柳澤 波香
- 13:30 11. フランス革命と薬の専売 —薬の自由販売は否とされた— 竹中 祐典
- 13:50 12. F. Magendieの処方集(Formulary) 英国第1版(1829年)について 辰野 美紀
- 14:10~14:20 休憩
- シンポジウム「日本の病院薬剤部・薬剤師の歴史」(6名)
- 14:20 13. 労災病院と薬剤部の変遷 労働者健康福祉機構 旭労災病院薬剤部 藤井 広久
- 14:40 14. 日本赤十字社と名古屋第二赤十字病院薬剤部の歴史  
名古屋第二赤十字病院薬剤部 徳井 健志
- 15:00 15. 名古屋大学医学部附属病院薬剤部の歴史  
名古屋大学医学部附属病院薬剤部 ○小倉 庸蔵, 鍋島 俊隆
- 15:20 16. 陸軍衛生制度史に見る薬剤官について 陸上自衛隊衛生学校 堀口 紀博
- 15:40 17. 名城大学薬学部専攻科の歴史 名城大学薬学部 半谷 眞七子
- 16:00 18. 日本病院薬剤師会の歴史 日本病院薬剤師会 加野 弘道
- 16:20~16:50 シンポジウム(質疑応答)
- 16:50~17:00 休憩
- 特別講演(1名)
- 17:00 徳川家康所持の香・薬を中心にして 徳川美術館 副館長 山本 泰一
- 18:00 閉会 挨拶 副年会長 篠田 愛信
- 18:30 懇親会 副年会長 西田 幹夫

年会・見学会参加申込：E-mailかFAX又は郵便で下記項目を記入し年会事務局へお送り下さい。出来ればE-mailで「日本薬史学会年会参加申込」と書いたA4用紙に、下記の1.~7.を必ず記入してください。(参加申込用紙は最終頁に掲載しています)

1. 参加者の氏名と所属 参加費(2,000円)
2. 連絡先・住所・電話・FAX・E-mail
3. 年会の昼食弁当申込(必要・不要)を記入 (1,000円)
4. 懇親会の申込(参加・不参加)を記入 (4,000円)
5. 見学会の申込(参加・不参加)を記入
6. 見学会の昼食弁当申込(必要・不要)を記入 (1,600円)
7. 振込金合計 合計記入(7,000円)

振込先銀行：愛知銀行・八事支店(店番222)

口座名：日本薬史学会 飯田耕太郎 口座：(普通)番号：698049

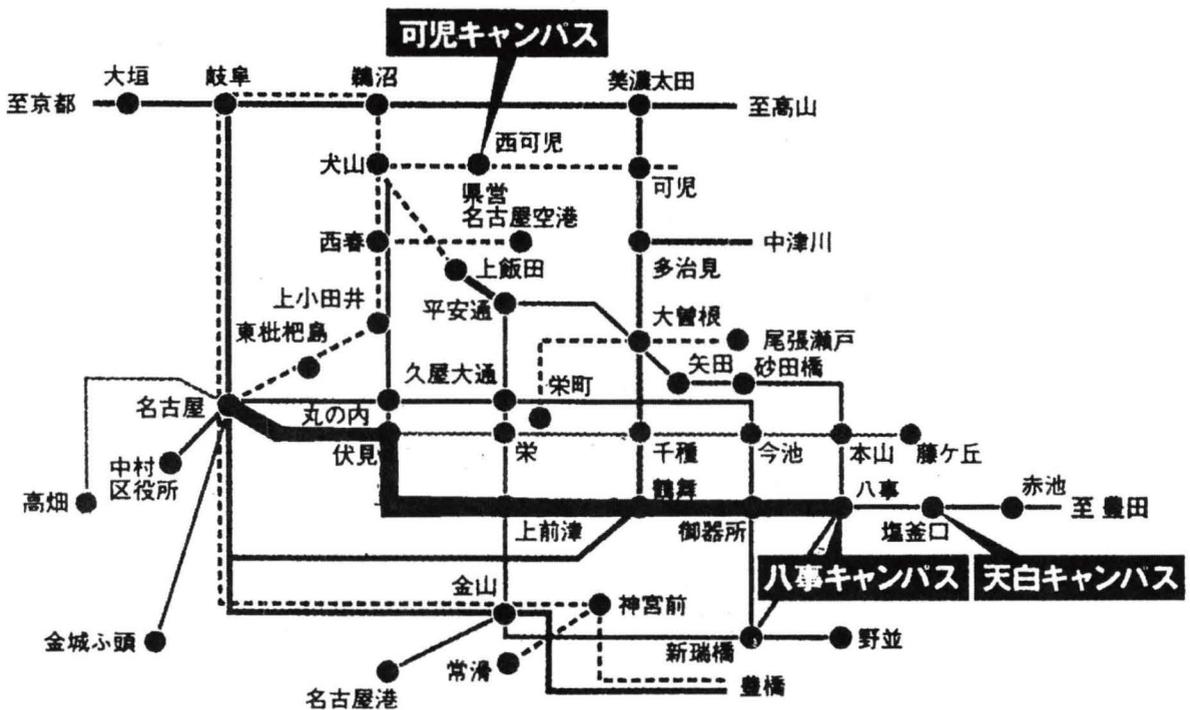
年会申込締切：平成18年10月11日(水)(必着)

年会事務局 連絡先：名城大学薬学部 薬学教育開発センター 飯田耕太郎

〒468-8503 名古屋市天白区八事山150

電話：052-832-1781(内線385) FAX：052-834-8090

E-mail：iida@ccmfs.meijo-u.ac.jp



## 名古屋年会・東海地区の医薬史蹟案内

### 東海地方

東海地方は本州の中央に位置して日本の“へそ”といわれ重要な地域である。岐阜県と伊勢湾を挟んだ愛知県、三重県に静岡県がふくまれ気候の温暖な地域である。濃尾平野は昔から農産物の産地として恵まれた地域で、最近名古屋の中京工業地域はトヨタ自動車を中心として発展し、又瀬戸を中心として陶磁器の生産が盛んである。最近、中部国際空港が開港され重要な海外交流の拠点となっている。また東海道新幹線が最初に開通した地域でもあった。静岡は早くから日本茶の生産が盛んで海外輸出の拠点であった。また、みかんなどの柑橘類、浜名湖のうなぎ、三重湾の貝類などの名産物がある。また伊勢神宮は日本の神社信仰の中心として江戸時代にお伊勢参りとして賑わった日本の旅のルーツでもあった。

東海地方には国立の岐阜大学医学部、名古屋大学医学部、愛知医科大学、藤田保健衛生大学、三重大学医学部、浜松医科大学、岐阜薬科大学、名古屋市立大学医学部、薬学部、名城大学薬学部、県立静岡大学薬学部、最近になって金城大学薬学部、愛知学院大学薬学部が開設されている。

### 〔愛知県〕

### 名古屋市

名古屋市はわが国第三の政令指定都市である。空襲で壊滅した名古屋市を戦後に復興させる時、百メートル道路を建設した。中京地区の商工業の中心で名古屋城を中心として都市が形成され、市内には6路線の地下鉄網が建設されて交通が便利になっている。名古屋城は現在、鉄筋コンクリートの建物で館内は博物館になっている。また近くには名古屋ドーム球場が威容を誇っている。市内には県や市の博物館、美術館、徳川博物館など多くの文化施設がある。中部国際空港が開港してトヨタ自動車をはじめとして、現在は日本で一番活気のある地域になっている。名古屋はうどんとそば、ただだし味が関東風と関西風の境目でもある。きしめん、八丁味噌、名古屋コーチン、ういろうなどが名産である。

### 名古屋市・尾張藩医、浅井家医学館

浅井家は代々尾張藩の漢方医。邸内に医学館を建て6代146年間にわたり名医を養成した。毎年6月に薬品会を開き多くの人を集めたという。浅井国幹は漢方の存続を訴えたが明治28年帝国議会で否決され医学館を閉鎖した。浅井家邸内に医学館跡の碑、市内の菩提寺常楽寺には顕彰記念碑がある。名古屋市の鶴前中央図書館および市博物館は浅井家の多くの資料を所蔵している。

所在地：医学館跡、名古屋市中区園井町4丁目：交通・地下鉄伏見下車徒歩2分、

常楽寺、交通・地下鉄東山線で本山下車徒歩7分。

### 名古屋市・伊藤圭介、医師、理学博士第1号

伊藤圭介（いとう けいすけ；1803~1901）

伊藤圭介は医師の家に生まれ医業を継いだ。京都に出て洋学を学んだ。シーボルトが1828年の江戸参府の時に長崎で学ぶことを薦められ、翌年、長崎でシーボルトから植物学を学びツェンペリーの「日本植物誌」を与えられた。この本を訳して「泰西本草名疏」として出版した。圭介は本草学、洋学、植物学者として大きな業績をあげた。57歳の時、幕府からの要請で蕃書調所に出仕した。その後、東京大学教授、植物園長となり、明治21年に学位制が定められたとき第1号の理学博士となった。名古屋市の鶴舞図書館前、東山植物園に伊藤圭介像がある。名古屋市朝日町に植物園を作ったがいまは碑があるのみである。名古屋大学図書館などに圭介の資料が保存されている。東山植物園には「万葉散歩の道」

がある。市内の中区錦3-4の亀末広という和菓子屋の前に、植物園であった「きよくえんあと」の碑がある。また市内中区丸の内に3-10に生誕の地の碑が建っている。

所在地：鶴舞図書館；交通・地下鉄鶴舞線鶴舞駅下車、

東山植物園；交通・地下鉄東山線東山公園駅下車。

## 名古屋市・歯の博物館

全国でも珍しい歯の博物館である。愛知県歯科医師会館の3階に1989(平成元年)にオープンされた。歴史的な歯科治療機器が展示されている。歯やお歯黒の伝統的な道具、歯や口腔についての展示がある。

所在地：名古屋市中区丸の内3-5-18；交通、地下鉄名城線、市役所駅から徒歩5分

## 名古屋市・科学館

科学のしくみを学ぶ「理工館」、生命と地球について学ぶ「生命館」、プラネタリウムを備えた3館からなる大型の科学館である。1~9階までの展示のほとんどか、体験しながら学べるようになっている。

所在地：名古屋市中区栄2-17-1；交通、地下鉄東山線、伏見駅下車徒歩5分

## 大治町・馬島流眼科、清眼僧都

清眼僧都は南北朝時代の人で代々の明眼院住職は眼科医を兼ねた。地名の馬島から取った馬島流眼科を名乗り本邦最古の眼科専門医であった。大寺院で眼病の入院治療施設もあったという。第28世園如僧正が長崎に遊学して散瞳薬を得て、手術器を工夫して白内障の手術をした。明治7年の医師法で眼病治療所は閉鎖された。寺内には晴眼僧都の木像があり本堂裏は小堀遠州作の回遊式庭園がある。

所在地：愛知県海部郡大治町；交通・名古屋駅名鉄バス津島行大治役場前下車

## 〔岐阜県〕

## 大垣市・江馬蘭齋、蘭方医学の開拓者

江馬蘭齋(えま・らんさい；1747~1838)

大垣藩の医師江馬元澄の養子として、はじめは後世方、後に古方を学び医師となった。1792年に江戸詰めとなった時、47歳で杉田玄伯、前野良沢から蘭学を学んだ。翌年、大垣に帰国後に当時としては早い時期に江馬蘭学塾をつくり美濃蘭学をひろめた。医師としては乱暴医といわれたが、梅毒の治療に蒸気風呂で評価を受けた。92歳の高齢で没するまで医業と教育に当たった。江間蘭学塾は蘭齋の門人たちにより明治の中期に至るまで90年間存続した。この江間蘭学塾跡には碑と禅桂寺に墓がある。市内の大垣医師会館に江間蘭齋碑がある。大垣城を中心として外堀沿いには散策路が整備され、芭蕉が奥の細道の旅を終えた地で芭蕉の句碑と像がある。

所在地：大垣市藤江町2丁目、交通・JR大垣駅より徒歩10分。

## 大垣市・蘭方医、飯沼愨齋・平林荘跡

飯沼愨齋(1783-1865)は17才の時に京都に遊学して小野蘭山について漢方医学を学び大垣に帰り医業を継いだ。その後、28歳の時に単身江戸に出て宇田川榛齋について蘭方医学を学び、大垣に戻り蘭方医として活動した。大垣の地に平林荘という別宅をつくり植物学を研究して講義した。愨齋は三十年ちかくをかけて『草木図説』全30巻を著し完成した時は80歳と言う。科学書としての植物図説は初めてのものである。草類126種、木類600種が収載されている。平林荘は植物庭園として大垣市教育委員会が管理している。

所在地：大垣市長松町・交通、大垣駅からバス約15分長松町下車

## 各務原市川島町・内藤記念くすり博物館

わが国最初のくすり博物館。岐阜県羽島郡川島町(現在は各務原市に編入された)のエーザイ工園内

に、エーザイ(株)の創業者、内藤豊次(当時(財)内藤記念科学振興財団理事長)により1971年6月に設立された。当初は合掌造りの6階建ての博物館であったが、現在は隣接した鉄筋コンクリート2階建ての博物館に医薬の歴史を伝える約4,000点の看板、薬店、製薬道具と資料47,000を収蔵し年数回の企画展の展示をしている。展示館の2階では各種の機器を使い健康状態を測定できる「体験コーナ」がある。

2005年11月に本館の左に2階建ての図書館が完成した。薬史学会の創設者の故清水藤太郎の平安堂文庫、緒方知三郎の緒方長寿文庫、大同薬室文庫をはじめ62,000点の図書が収蔵されている。

博物館がある構内に**薬用植物園**がつくられていて600種の薬草、薬木が栽培されている。また工園内にあるエーザイの**製剤工場**を見学することが出来る。この工園内には大阪万博の日本庭園の一部が移設されている。

近くの犬山市には**博物館明治村**、**犬山城**などがある。犬山城域にこの地の出身者である明治の薬学建設者**下山順一郎**の**胸像**がある。地元の薬剤師により1931(昭和6)年に建立されたものである。この元像は1913年に東京大学薬学科の現職教授として逝去された時、当時の薬学科教室の玄関脇に建立されたもので、現在も東大薬学部大学院研究棟と講堂の中間に設置されている。

所在地：岐阜県各務原市川島竹早町1、交通・東海道線尾張一ノ宮駅東口からバス25分。

[文献：清水藤太郎；薬史学雑誌、6巻1号、10-11(1971)；  
篠田愛信；薬史学雑誌、39巻、265-269(2004)]

## [三重県]

### 松坂市・本居宣長記念館・宅地跡

本居宣長(もとおりのりなが；1730~1801)

本業は医師であるが、古事記伝、玉勝間などの著書で国学者として有名である。小児科医として活躍した。本居宣長記念館には医療用具、薬箱、診療を細かく記録した「済世録」、製薬をして薬の宣伝を書いた文が重要文書として残されている。

記念館の隣に旧宅「**鈴屋**」がある。現在は**県立松坂公園**となっている。県立松坂公園には**松坂市立歴史民俗資料館**がある。松坂木綿と伊勢おしろいの資料を常時展示している。松坂牛が名産ですき焼き料亭が多い。

所在地：松坂市殿町1536-7松坂城址公園内；交通・JR紀勢線松坂駅下車、バスで市民病院前下車徒歩3分

### 勢和村・中山薬草薬樹公園

野呂元丈(のろげんじょう；1693-1761)

元禄6(1693)年に波多瀬に生まれ、京都に出て儒学と本草学を学んだ。八代将軍の吉宗の医師となり丹羽正伯とともに採薬師として全国の薬草を採取した。18世紀の後半に和蘭医方の基礎の確立に貢献した。この野呂元丈にちなんでつくられた**中山薬草薬樹公園**である。園内には薬草、薬樹、ハーブなどが分類されて栽培されている。薬草図鑑と薬効などが示されている。公園の一角に**野呂元丈の碑**がある。

所在地：多気郡勢和村朝柄3127；交通・近鉄特急、松坂駅から三交バス 大石下車

その他の医薬史蹟については、山川浩司編著『全国医薬史蹟ガイド』(薬事日報新書)を見てください。

## 初の「日本薬史学会賞」授賞

薬史学会通信No.41で告知された「日本薬史学会褒賞規定」に基づく選考委員会が本年1月28日に開催された。席上宮崎正夫会員が選ばれて、理事会に推薦されて、初の日本薬史学会賞が授与されました。表彰式は2006(平成18)年度総会の時に行われましたが、宮崎先生は体調が優れず欠席されたので、山田光男理事が代わりに賞状を会長より受けてお届けしました。

授賞対象：シーボルトの処方箋に関する研究

授賞理由要旨：

長年にわたり、本学会会員および評議員として活動される中で、病院薬剤師として身につけられた専門学術知識を駆使して各地図書館などに保管されているシーボルトの処方箋などを丹念に翻訳、考察されて薬史学雑誌に継続して発表されました。これらの研究業績は科学史の上でわが国第一級の文書である「シーボルトの処方箋」を解析し、当時の薬物治療の実態について新たな視点を与えられました。当然、学位論文に匹敵する水準のものであり、本学会のみならず、この方面の研究者たちよりも高く評価されております。現在、この分野は「医療薬学」として薬学を構成する確固たる地位が確立されてまいりましたが、宮崎先生は将に、医療技術専門職従事者の現場に根ざした薬史学研究のあり方について、先駆者として一つの典型を示されました。

宮崎正夫先生略歴：

1930年8月20日生まれ(愛媛県出身)

1956年 京都薬科大学卒業

1957年 松山赤十字病院 入社

1989年 同病院 退社

業績目録：

「アヘン戦争の薬学的考察」	薬史学雑誌	第23巻	102～110頁(1988)
「シーボルトの処方箋」	薬史学雑誌	第26巻	12～23頁(1991)
「シーボルトの散瞳点眼薬」	薬史学雑誌	第29巻	469～483頁(1994)
「シーボルトの処方集(1)」	薬史学雑誌	第30巻	116～124頁(1995)
「シーボルトの処方集(2)」	薬史学雑誌	第31巻	49～59頁(1996)
「クロロホルム麻酔について」	薬史学雑誌	第32巻	33～37頁(1997)
「ボードインの処方」	薬史学雑誌	第33巻	29～34頁(1998)

### 第14回 医療文化サロン展《医療・福祉の時代》

日 時：平成18年11月1日(水)・2日(木)・3日(祝)

場 所：護王会館

京都市上京区烏丸通下長者町(京都御所蛤御門前 護王神社内)

TEL 075-441-5458

主 催：医療文化史サロン協賛会

後 援：日本薬史学会ほか

## 北海道支部だより

北海道支部からの近況を報告します。

### ・第53回北海道薬学大会

この大会は下記8団体の合同企画により5月13日(土)、14日(日)に札幌市教育文化会館とウエルシ  
ティ札幌厚生年金会館で開催された。北海道に於いて幅広い領域で活躍する薬剤師のコンベンション  
である。

北海道薬剤師会、北海道病院薬剤師会、日本薬学会北海道支部、日本生薬学会北海道支部、  
日本薬史学会北海道支部、日本社会薬学会北海道支部、北海道学校薬剤師会、  
北海道女性薬剤師会、全国薬学技術公務員協会北海道支部

特別講演8題(表1)のほか、日本薬史学会北海道支部会員の研究3題(表2)はプログラム編成の都  
合により北海道薬剤師会 薬局部会—日本社会薬学会北海道支部の合同ポスター発表会場で発表  
された。

日本薬史学会北海道支部の平成18年度総会が5月13日の特別講演に先立って行われたが、「正倉院  
薬物の世界」は日本生薬学会北海道支部の後援を得た。本年3月、北海道薬剤師会の役員の異動があ  
った。支部に登録されている会員38名中35名が薬剤師会としても活躍している関係上、支部役員の  
人事異動を敢えて行いました。新役員の一覧表(表3)を示します。

表1

5月13日(土)

大会特別講演

「医療制度・薬事制度改革と薬剤師」

日本薬剤師会 専務理事 石井 甲一

日本生薬学会北海道支部

「漢方薬によるがん転移の抑制とその作用機序」

富山大学・和漢医薬学総合研究所・病態生化学分野 教授 濟木 育夫

全国薬学技術公務員協会北海道支部

「寄生虫検査の現状と遺伝子を用いた同定技術の開発」

北海道立衛生研究所 衛生動物科長 八木 欣平

日本薬史学会北海道支部

「正倉院薬物の世界」 (株)常磐植物化学研究所 顧問・日本薬史学会 評議員 鳥越 泰義

5月14日(日)

薬局部会・日本社会薬学会北海道支部合同部会

「平成18年度診療・調剤報酬改定における後発医薬品使用促進についての

厚生労働省、中医協の基本的な考え方」

日本薬剤師会 理事 安部 好弘

学校薬剤師部会

「日本学校薬剤師会を巡る諸問題」

日本学校薬剤師会 会長 杉下 順一郎

北海道病院薬剤師会

「変革する医療と薬剤師」

日本病院薬剤師会 会長 伊賀 立二

北海道女性薬剤師会

「臨床の立場から見た注意欠陥／多動性障害のこどもたち」

北海道こども心療内科 氏家医院 副院長 松田 孝行

表 2

1. 構成生薬からみた各社漢方エキス剤の比較	はるにれ薬局	○根布谷ふみえ、河野 裕樹、櫻庭 秀一、小寺 一
2. 東京薬学新誌に関する考察(1)黎明期の我が国薬学の状況		日本薬史学会 ○吉澤 逸雄
3. 星一のビジネスモデル—大正期における売薬の一形態—	(株)北海道医薬総合研究所	○本間 克明

表 3 平成18年度 役員一覧

支 部 長：斎藤 元護			
副支部長：高田 昌彦	東洋 彰宏		
幹 事：伊藤 雅美 <sup>1)</sup>	小寺 一 <sup>1)</sup>	志賀 隆博	
高橋 保志 <sup>1)</sup>	竹内 新仁	武田 昌之	
西澤 信	西部 三省 <sup>1)</sup>		
古川 薫 <sup>1)</sup>	早勢 伸正 <sup>1),2)</sup>		
向山 侑 <sup>1)</sup>	本間 克明 <sup>1),2)</sup>		
山岸 喬	吉澤 逸雄 <sup>1),3)</sup>		
監 事：千葉 博志	斉藤 浩司		
事務局長：吉澤 逸雄			
顧 問：伊藤 敬一	大森 章	高島 申治	
(注) <sup>1)</sup> 常任幹事	<sup>2)</sup> 会計担当	<sup>3)</sup> 事務局長兼任	

(北海道支部事務局長 吉澤 逸雄)

### 日本薬史学会札幌年会印象記

山 朝江

歴史ある日本薬史学会の51年目という節目の年に入会させて頂きまして身に余る光栄です。それも北海道支部を立ち上げた年、ロゴマークが決まった記念の年でした。初参加の私には苦手の発表という初チャレンジまで付いています。ナナカマドの実が赤く色づいた10月1日に会は開催されました。身近な昆布やアイヌの発表から始まり薬を巡りいづれも深く追求された発表を聞き知的財産の宝庫に立ち会っているかのような至福の時を過ごしました。普段使わない脳細胞が活性化しもっと知りたくなりました。今回私が発表するに至った経過をお話します。4月1日に三澤教授からメールを頂いた薬理同窓生の私は、エープリルフールですか？と聞き返したのですがそれから大変でした。パワーポイントを子供に習い、星一の事を調べに通った40年振りの母校は立派になり浦島太郎の心境になりました。星新一著「祖父・小金井良精の記」を読み日本の医薬のルーツの一端を知りました。函館医師会長をしている主人がかつて三師会を立ち上げていました。函館薬剤師会会長が会員にお誘いの広報をして下さったり来年2月の道南薬学大会に発表させて頂く事になりましたので今回の薬史学会のご紹介もさせて頂きま

す。今夏、とあることからクラーク博士のBoys, be ambitious!を直接聞いた札幌農学校1期生の大島正健が後に甲府中学校の校長に赴任し、その遺訓に感動して私の父が北大に来たことが解りました。甲府一高の校庭で大島正健の碑を見て自分のルーツ探しに至りました。10月には壁文字に「メモリーオブクラーク・宮部」と書いてある日独協会で大島智夫先生の講演を聞きに行きます。今回宮部先生の講演を興味深く聞きました。一挙に世界が広がって来ました。歴史は過去だけでなく未来に続く礎となります。

## エキスカージョン記録

札幌での日本薬史学会年会行事の一つとして企画されたエキスカージョンは10月2日(日)の小樽視察で、年会実行委員会から4名の先生方が付き添われて参加者9名、計13名が8時45分に札幌駅北口を貸し切りバスで出発、高速道路を小樽へ向かった。ガイドの案内の後、参加者が自己紹介を行ううちに、進行左手の山の上に聳える白亜の北海道薬科大学が見えてきて小樽市内に入る。一般道路を小樽運河に沿って北海道鉄道発祥の地、手宮の鉄道記念館の横を通り、漁港のある祝津海岸の坂道を上る。坂の半ばで下車し、にしん御殿、旧青山別邸(小樽市指定歴史的建造物第3号)を見学する。

にしん御殿という語は北海道大百科事典(昭和56年)では見出し語としては使用していないが、一般には(1)旧青山別邸のようなにしん漁で富を得た網元が贅を尽くして建てた大邸宅、(2)漁場建築として建てられた規模の大きなにしん番屋の何れもにしん御殿と呼ばれているようだ。

昭和33(1958)年を最後に、繁栄を誇ったにしん漁場からにしんが姿を消してしまった小樽では、今日いづれも観光資源となっている。

青山家は酒田より渡来した網元で、漁場の水揚げは、大正3年頃、1万石(7,500トン)以上で、現在の金額では約25億円以上と言われた。最盛期の明治7(1918)年に二代に亘り財をなした青山家当主は、郷里の酒田で日本一の大地主と言われた本間家の邸よりも豪華な別邸を6年間の歳月をかけて完成させた。その建築費は当時の金で31万円という(当時、東京新宿の伊勢丹デパートの建築費は50万円とガイドが説明した)。建築、調度、蒐集された書画、骨董、それらは古き良き日を偲ばせてくれた。

次に、日和見山灯台の下の小樽市鯨御殿を見学した。その由来は明治30(1897)年積丹半島の泊村ににしん網元の田中福松が建てた番屋である。昭和33(1958)年、当時の北海道炭礦汽船(株)が創立70周年記念として購入して、現在地に移転して、小樽市に寄付したもので北海道指定文化財である。玄関の前に「鯨御殿」の字が彫られた板の額が掛かっていたが、左書きなので、移築後に観光用に書かれたものと判断した。一部二階建てで総面積は185坪で、一階の半分が網元の主人一家の私的住居と帳場で、半分は台所、家事使用人、漁夫の部屋で、漁期には2段式ベッドが置かれ、総勢120人位の使用人が起居したが、現在は鯨漁の漁具、漁夫の生活に関連した品物、写真が展示されている。帳場には共同生活の為の規定が書き出されている。詳細は省略するが、ドブクロを醸す酒部屋と二階の座敷裏の忍者屋敷と同じ発想の家人隠れ部屋があった。これらは荒くれ者の多かった時代に番屋を維持する為に不可欠なものであったようだ。

漁港前の青塚食堂で北の海の幸の昼食を頂いて休憩後、バスで埠頭に近い運河公園前の旧日本郵船(株)小樽支店へ向かった。明治36(1903)年4月の大火で木造の倉庫と事務所が焼失した翌年に工部大学校造家学科一期生でコンドルの弟子の一人である左立七次郎の設計により近世ルネッサンス様式の石造二階建ての社屋の建設が進められた。総工費6万円で一階は船会社の支店店舗に相応しいオフィスと立派な金庫室、二階は広い会議室と貴賓室などである。いわゆる西洋館の大きな窓ガラス、耐寒用の複

層ガラス、ロールブラインド、天井のシャンデリア、金唐革紙の壁紙、柱や階段などのワニス塗りの優美な木彫のデザインなど、高価な輸入品と日本の伝統工芸を巧みに取り合わせた当時の技術レベルの高さは、昭和62(1987)年の修復作業時に行われた建造時の材料、技術の調査、研究で裏付けられた。国指定文化財に相応しい重量感が全館に満ち漂い、風雲急を告げていた国家の非常時に施行、完成させた当時の三菱財閥の心意気に敬服したい。

即ち、工事の始まった明治37(1904)年は日本は国運を賭しての日露開戦の年であり、落成披露が行われたのは明治39(1906)年10月1日と記録されているからだ。この間、日本が勝利を収め、明治38(1905)年9月、米国ポーツマスで講和条約が結ばれた。樺太の北緯50度以南が日本に割譲されることとなった。この真新しい会議室で樺太国境画定会議が11月に開催された。この部屋に入った時、先ず第一に会議の時はガラス窓を通して海が望める上席には客であるロシア側の委員ではなく、勝利者たる日本側が座ったとの説明があった。隣室には、旧樺太国境の境界石標(レプリカ)などが展示されていたが、昭和12(1937)年、吹雪の国境を演出家の杉本良吉と女優の岡田嘉子がソ連に亡命した新聞記事を筆者は当時小学生であったがよく記憶している。

日本郵船支店ビルの完成、港湾設備の拡張と樺太はじめ海外航路の新設で小樽は発展して、コンドルの弟子、辰野金吾設計の日本銀行小樽支店をはじめ金融機関の建築が完成して「北のウォール街」が形成された。現在、それらの建造物を含む80件以上が小樽市文化財あるいは歴史的建造物と指定されている。但しその総てが公開されてはいない。

小樽市指定第32号の岡川薬局は三階建て、屋根はマンサード形式、洋風の窓である。当日は休店日なので古式の天秤、薬研などが飾られているという内部の見学は出来なかったが、NHKで平成5年5月19日に放映された「日本体験こだわりの旅：小樽」の録画ビデオをバス車内で見る事が出来た。往事の繁華街、若松一丁目の岡川薬局は初代の岡川善太夫が明治26(1893)年に福井県より移住して、くすり、小間物の販売を始めた。昭和3(1928)年、長男松太郎が第2代を継ぎ、薬種商の免許を取得した。3階建ての現店舗は昭和5(1930)年に落成した。3代目は松太郎の長女スズで、大正13(1924)年明治薬専卒で小樽の女子薬剤師第2号、昭和4(1929)年、薬剤師の東与四郎と結婚したが、与四郎は昭和10(1935)年死亡された。以後一人で薬局を守り、一男一女を薬剤師に育てられ、平成7(1995)年91歳で他界された。当主の第4代は長男の照男氏(北大経済学部、富山大学薬学部卒)である。この項はバス乗車時に配られた小樽薬剤師会会報誌「薬包紙」55号のコピーより抜粋させて頂いた。

最後の下車地は小樽運河で、その景観を楽しみ、道路を隔てて向かい側の北一硝子で自由行動のため一時解散。アイスクリームで喉をうるおして長めの小休止。所定の集合時刻に観光バス駐車場に集合、バスは「坂の街小樽」の日銀通りを上り、駅へ向かった。15時半に解散。今朝、札幌駅まで出迎えて下さった吉澤先生に見送られて、札幌および千歳空港へと向かった。建造物を通して小樽の歴史をめぐる一日の旅は無事に終わった。

本稿の執筆には、当日配られた案内パンフレットに併せて下記小冊子を参照した。

北川佳枝：「近代商業建築を観る一日日本郵船株式会社小樽支店の再生」

INAX ALBUM 3・INUX, 東京(1992)

(末廣 雅也)

